

国木田独歩の佐伯での生活

(三)

山内武麿

(賛助会員・佐伯市城下東町)

七日の記を見ると、この日独歩兄弟は金比羅山に登ったと記してある。

本日午前収二と共に郊外に出て金比羅山に登る。此の山は佐伯町の南に当りて兀立する山なり。眺望佳なり。

と、ある。金比羅山とは煙草山のことである。独歩は生来山野を跋涉することが好きで、得意でもあった。このように暇さえあれば弟収二を伴って郊外を散歩し山に登っていた。

日記には書いてないが、独歩兄弟は六日に富永旅館から芳島の月本旅館に宿舎を替えている。

現在は埋められて幹線道路となっているが以前こゝは内町川という川が流れ、船頭町河岸の住吉神社前から番匠川の水が流れ込み、新屋敷裏、内町土井町裏、城東裏

と流れて、向島のはずれで中川と合流していた。小舟が往来し、浦まえのおろし舟が毎朝この川に架る太平橋、諸木橋のたもとに集まって賑わっていた。広小路と芳島とを結ぶ橋が諸木橋で、この橋のたもとの芳島側にこの月本旅人宿があった。この宿から鶴谷学館まではこの木橋を渡って広小路に出ればすぐ近くにあった。今はこの宿のあとに大きなビルが建って昔の面影は全くない。

九日の記を見ると、前日の八日に尺間山に登ったことを書いてある。

昨日早朝収二と共に寓処を發し尺間山を志して遠行の途に上る。

と、書き出し、尺間山は佐伯から西北三里のところにある高い山で、絶頂に尺間神社という祠がある。と、説明

してその頂上の様子を、

頂はこれ石巖々たる難山なり。兀として秀立し、四方の群山を脚下に瞰視す可し。東方大洋を望み、三方は連山波濤の如く遠く肥州日州に連なるを視る。

と、叙して、咽ぶような溪流の音、樹木の蔭にたゞずむ茅屋、山間に住む人々、その生活、樵夫や牧者、自分が見たいと願っているものはたゞ大きくて美しい自然と、その間に住む意味深い簡易生活をしている人々である。

大きい山、高い岳に登り煩わしい世間から脱け出して親しく無言で漠々と広く、無窮で奥深い自然と真正面に相接する時は、自分は言うに言われない暗い悲しみを催す。昨日もまたそうあった。自分はウォーズウォースの詩想によって、自然と人生の調和を得ることを信じる。しかしこの暗愁は容易に払うことが出来ないのは何故か。言うまでもない自分はまだウォーズウォースの詩想を充分深く味わうことが出来ないからである。自分はまだ低いのだ。と、反省し述懐している。

ア、シムプル、ライフ。而して此の大自然、泡沫の如き人の命、而して此大宇宙。

生くる者は人のみに非ず。見よ、鳥や、虫や魚や、

凡て皆な然り。死する者は人のみに非ず。見よ魚や虫や鳥や悉く然り。アア生物、其の意味は如何、其の望は如何、其の目的は如何。

と、悠久の大自然、大宇宙と限りある生命をもつ生物とを対照して考えている。そして、

余が幽思は峯を降り、谷に下り、雲を仰ぎ海を望む間も常に此の如き也余は只だ大調和をのみ観出さんことを希ふ。

と、自分の悲しい思いは消えないが、自然と人生との大調和を見出すことをただ願う。と熱望して、詩を求めている。

昨日路傍で見たあの楽しそうな一家族に宿っている詩神の調和の声はどうか。あの山谷で出会った年老いた樵夫と、その前を先導する子供の上に住む詩神の深い声はどんなか。遠い山々の絶頂から立ち登る黒い煙に住む詩神はどんなか。千百の山間の谷にある千百の村落に住む詩神はどんなか。

多くの人間は窮まりない自然の中に、自分が想像する像で住んでいる。この谷間のかこの人々とこの無窮の自然とを調和させている詩神の声はどんなか。この声をウ

オーズウォースは何と聞いたか、ミルトンは何と聞いたか、グレイは何と聞いたか、カーライルは何と聞いたか、エマルソンは何と聞いたか。ゲーテは何と聞いたか、自分は何と聞いたらよいか。と詩神の声を求めて、

山谷にも悲事は絶えず。詩神の幽音は之を何と歌ふぞや。嗚呼余は想像の靈妙なる翼をかりて詩神の琴線を逐はん。

と、強く強く詩を求め、詩に憧れている。

この尺間登山は独歩に深い印象を刻み込んでいる。

十一日の記に

昨日今井忠治、田村三治両氏より書状来る。

今井氏に返書を認め、天職の容易になり難きを言ふ。

田村三治氏に返書を認む。

と、ある。この田村に出した返書は次のようなものであった。

学校の事万事都合にて日々授業致し居候 先輩連並に生徒への受けも至て宜しき方なり、小生元來教師を好まず只だ己む得ずして此に及びたるが故に、心事何となく自由にして只だ一直線に職業に尽すの外また納

れらるゝ事に付きての例のあるまじき、心配少しもなく只だずんずんやるが故に却つて先方から畏敬尊敬致す傾あり大に喜び居候、人心を制するの道自らこゝに在りと思はれ候

佐伯と申す処は氣候も悪しからず且つ風景に富み魚類多く以て生活に容易なる地なれば此等の点より言へば小生も亦不平なし

友なきが故に殆んど慰むる処なきに似たれども幸に愚弟同道中ゆへ全く寂寞を感じず 雨の夜には共に語り 道を行きては共に希望を談ず また以て住み慣れざる客情を慰むるに見る。

佐伯に來り僅か十日而して既に三個の山に登り候 其の最後は則ち一昨日の日曜日 尺間山と稱する佐伯を去る三里の高峯に攀ち終日峰より峰谷より谷に涉りて暮し候 其朝収二と共に語りて云ふ

今頃は吾が教会の人々集まり敬なる礼拝の式は開かれ、祈祷は捧げられ説教は始まりしなる可しと、而して小生等は自然の世界を跋涉して上帝の愛を讚美致し候

(以下略)

この手紙で、この頃の独歩の生活の様子がよく解る。教

師の職は元来好きではないが、やむ得ずしてその職に就いた。職に就いたからには奮励努力してその職責を全うする積りであると覚悟している。それで先輩連や生徒からの受けもよいと喜んでゐる。独歩は真面目な青年であつた。

そしてまた佐伯がとても気に入つてゐるらしい。殊に山野の美しさに強くひかれてゐる。散策好きな独歩は佐伯に来て僅か十日、その間にもう三つの山に登つてゐる。しかも尺間山まで登つてゐる。暇さえあれば山野を跋涉し自然の美に接して喜び楽しんでゐる。佐伯の山、野、海、川の美しさにどれ位魅せられたかよく解る。次にきびしく自己反省をしてゐる。

自ら思ふ、事を成さんと欲せば為すに在り、義務は義務なり、尽さざる可からざるが故に義務なり、故に尽さざる可からずと感ぜざるは義務の念乏しきことを證する者也。

と、義務を果さねばならぬと自省し、また思ふに今の自分はまだ信仰が浅いと反省してゐる。どうして信仰が浅いのか、自分は神を信じないではない。大いに信じてゐる。ただ神を思うことが少ない。何故神を思うことが少

ないのか。シンセリテイでないからである。何故シンセリテイでないのか、それは瞑想すること、反省することが足らないからである。全くシンセリテイでないわけはない。常にシンセリテイでない、多くの場合シンセリテイでないと反省する。

克己の念足らず、遵節の心足らず、奮励感激の情足らざる所以の者、一にシンセリテイならざるに帰すと、強く自分の不甲斐なさを責めてゐる。

シンセリテイとは誠実、真実、誠意、まごころ、純真と解する言葉である。独歩はこの言葉をこの記の中によく使つてゐる。独歩が誠実なまじめな人間であることが解る。独歩はこのように常に反省を繰り返してゐた。

次に英雄論を記してある。

英雄なくして吾人生を失望す

と、書き出して、自分は今になって初めてカーライルが英雄を崇拜する本来の趣旨を会得した。もしこの世界にクリストなく、ミルトンなく、ルーテルなく、その他のシンセリテイを以てこの世に立ち人を教え、人類を導き人を支配するものがなかつたら、自分はこの人生に失望

する。自分は英雄のもつ雄々しい魂と真心を通じて人生の希望を認める。英雄が無ければこの世は空である。たゞ愚人の衆合に過ぎない。獣の群と変りない。

英雄によってシンセリティを知り、シンセリティをもって神を仰ぎ、世界の神聖を信じる。こうして信仰が起り希望がわいてくる。

もし自分が英雄になることが出来なかつたら人生は闇である。英雄となるのは義務である。クリストが云つたお前は世の光である。山の上に建っている城はかくれることはない。燈を燃して星のおく者はない。と、その通りである。神は凡ての人が悉く英雄になることを望んでいる。

「英雄たるは義務なり。」之れ吾が信仰の粹也。と、英雄になることを強く望んでいる。即ちシンセリティをもって人を救い導く真の英雄たることを熱望しているのである。

十二日の記にはカーライルの英雄論とウォーズウォースの詩の読後感を記してある。

カーライルの英雄論で彼の人生の偉大さを見ることが

出来、ウォーズウォースの詩で彼の人生観の奥深さと温和さを知ることが出来る。カーライルを読むと憤然として起ち上り、ウォーズウォースを読むと黙って心が落着く。この二つの本は独歩の愛読書で常に読んでいた。

十三日の記には詩及び詩人の目的を記してある。

習慣の昏睡より人心を醒起し、吾人を囲む此世界の驚く可き愛す可きを知らしむこそ「詩」の目的なれ。更らに一歩ヲすすめて言へば人をして自らを此驚く可き世界の中に見出さしめ神の真理の中に人生の意義を發明せしむるこそ余が詩人としての目的なれ。

と、詩、詩人の目的を述べて、

それであるからまず自分自身を一層より深く神の宮であるこの驚くべき世界の中に見出し、自分の周囲の人、社会、市街、村落、男女、草木、泉流、夕陽、鳥雀、炊煙、雨声、この凡てを驚くべき愛すべき不可思議な世界の中に見出すべきである。

言ひ換えばまず自らが一層強く目覚めることである。

されど憐れむ可き人性

果して出来るものやら、とあやしんでいる。